

道を考える

文 中野 東禪

東北の地にも、仏法は早くから伝わっていた。城下町などの文化の中心部では、古くは五百年は歴史があった。禪が伝わってからも二百年ちかくは過ぎていたであろう。

しかし、山ふかい北上山地に仏僧がしやく錫をとどめ、仏寺が建ちはじめてからは、せいぜい数十年から百年くらいしかたつていなかった。

そのような辺鄙へんぴな地にあつても、僧たちは学問と、いきいきした行を伝えていた。

二十二歳で出家した鞭牛さまの学問修行は、目に見えて深まっていた。そこで学んだ仏法は、禪の書であつたろうし、また八宗綱要といわれるような仏教概論でもあつたろう。

それに、当時は一般的であつた真言や咒法のような秘密の教えも学習したであろう。そのことは、のちの鞭牛さまの活動や信仰になつてあらわれてくるのである。

さらにまた、和歌や、漢籍、書道なども修めたのはまちがいないことであつた。

座禪とは無念無想を定としてかげも形もなき人ぞ知る

生れ来て後生を顧ひ老いの身も杖とるとても座禪念法

と、のちに詠んでいる。座禪は生涯おこたることがなかったようである。

そして、鞭牛さまは、人間として禅僧として、自分の中のふつきれないよどみから、脱落し、しんそこつきぬけることを念じつづけていたのであつた。

黒いとは黒染ごろも夢ぞかしころも黒かれころ白かれ

と、うたうのである。さらに、自己の心を仏教の基本に照らしてみるのであつた。

火水地本来空の心なり善惡ともにわが心なり

出家修道十年を経て、三十三歳になった鞭牛さまは、北方の種市の東長寺へ住職としてすすんだ。その間に、師の見牛和尚は、能登の大本山総持寺五院の洞川庵へ、一年間の輪

番住職として栄転していた。

鞭牛さまは、種市に五年の間住んだ。ここは、修行の土地からはほぼ百キロは北方であった。今の岩手県の最北端の太平洋側の町である。八戸に近く、海岸はひらけ、かなり内陸まで平地がつづいていた。そこは道が発達し、田が耕され、水利がよく行きとどいて、春から夏にかけては太平洋から、あたたかい風が内陸ふかくふきこむ土地であった。山から流れ出たつめたい水も、田に入るころには充分にあたたまっていた。

生まれ育ち、牛と歩いた土地とはちがつていた。岩山の多い南の土地では、山からおちる水は、あたたまらないうちに田に入れないし、海からのあたたかい風は、高い岩山にさえぎられていた。そのいりくんだ山は、五月から八月のいちばん大切な時期に、霧につつまれるのであった。

その山国にひきかえ、この種市で何よりも印象的であったことは、広い、そして、よくゆきわたる道があることだった。

このころでは、農耕具の改良は一段とすすみ、各藩はきそつて治水、開墾、増産、新産業を奨励していた。

吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛は、大型船で太平洋を廻船し、三陸の海産物を直接江戸へ出荷することに成功していた。

また、吉里吉里村の田鎖一族は、三代にわたる研究の結果、定置網の先駆となる大謀網に成功していた。そして、山には鉱脈をさがす夢多き技術者たちがいた。

鉱石を運んでいた鞭牛さまは、永年の間に、殖産の知識とカンを身につけていた。しかも足で歩いて、山や沢を広い範囲にわたって見てきた彼にとって、方位をはかり、地の利を考えることは、もう本能にちかいいものになっていた。

五年ののちに、三十八歳になっていた鞭牛さまは、橋野村の林宗寺へ迎えられた。彼の出家得度した栗林村の常楽寺とはとなり村である。

橋野村は、釜石の北の大槌湾から、橋野川ぞいに、西へ二十キロほど入った山ふところの村である。この村の西の峠をこえて、さらに西へ二十キロほどゆけば遠野がある。この橋野村、山田湾や大槌、吉里吉里などの海産物を遠野市場にはこぶ通商の要路であった。

林宗寺は、橋野村の南岸の崖の上にあった。そこは山の上で、建物も小さなものでしかなかった。彼は入山するとまもなく、寺地を里ちかくにもとめ、本格的な寺院にすることを考えた。

一ヶ寺をあずかる立場になった鞭牛さまが、まず考えなくてはならないことは、こうした寺づくりの問題であった。お寺は人々の心のよりどころである。それには、まず地理的にも寄りやすいところであり、かつ、人の心を清める場所でなくてはならなかった。それ

は村びとのくらしに密着した問題である。

この寺地移転の事業は、鞭牛さまのからだの中にしみこんでいた能力と、そして、牛方時代に漠然とみていた殖産への夢とが、いつきにふき出すきっかけになったのである。

(つづく)